

序 Preface

富山大学杉谷キャンパスは、医学部、薬学部、和漢医薬学総合研究所、及び大学附属病院の4つの教育研究部局を有しており、本学及び地域における医薬学教育研究のメッカになっています。毎年、同キャンパスの全教員の研究業績を『富山大学杉谷（医薬系）キャンパス研究活動一覧』として取りまとめ、公表してまいりました。今回の刊行は再編・統合前の富山医科薬科大学時代から数えて、33回目となります。

ところで、わが国で少子高齢化が深化するにつれて、新たな社会問題が顕在化してきています。医療分野で言えば、これまでは住民から医師・看護師不足などにより、量的な水準の確保が求められ、行政や医療関係者はその対応に追われてきました。ところが近年、量的水準の維持では解決できない、質的、あるいは複合的でメンタルな社会問題が顕われているように思われます。

先般、私は、本学の医薬理工系教官が新たな社会問題に取り組むフォーラムに参加する機会を得ました。それは大学院生命融合科学教育部（博士課程のみ）主催の『誰でもわかる視覚障害者の能力』という研究集会です（平成22年2月20日、富山市内名鉄トヤマホテルで開催）。

私はこのような教育研究分野の門外漢でありながら、メンタルな社会問題への先行的な取り組みと思いました。その理由は二点です。第一は教育研究組織面の特色にあります。近年刻々変化する複合的な社会問題に取り組むには領域横断的な連携研究が不可欠ですが、大学院生命融合科学教育部はわが国初の医薬理工連携の教育研究組織でもあり、まさに、本領発揮の感がありました。

第二の理由は取り組み課題・方向の明確さです。この教育研究は、本学の特性である脳神経科学研究の蓄積を踏まえながら、障害者ばかりでなく、その障害を補う「代替性潜在能力」に焦点が絞られていることです。当日は様々な障害を持つ人々の数学、音響、音楽、医学、語学、コンピューター分野の健常者が決して太刀打ちできない代替能力について演奏をも加えて具体的に紹介されました。私はこの取り組みが健常者を含めたわが国の初等・中等・高等教育全般を通じて、教育に新たな可能性を拓き、人間力の発揮に大きく貢献するものと期待を抱きました。

『富山大学杉谷（医薬系）キャンパス研究活動一覧』の発刊の機会を利用して、本学の杉谷と五福（人文社会工学系）キャンパスとのごく最近の連携研究の一端を紹介し、私なりの感想を述べさせていただきました。富山大学は新たな21世紀社会の構築に向けて教育・研究・社会貢献を進めています。この研究業績集を活用していただき、本学に対する引き続き忌憚のないご意見・ご指導を賜りたく存じます。

学長 西頭 徳三
President Saito Tokuso